

## ペナン日本人学校での3年間

江別市立大麻泉小学校  
教諭 長根 幸子

### 1、はじめに

わたしは、平成22年4月から平成25年3月まで、マレーシア・ペナン島の在外教育施設で派遣教員として3年間勤務いたしました。時にはペナン島での生活に一喜一憂し、時には日本という国の素晴らしさにひとり感動し、時にはマレーシアの風景のうつくしさに心を震わせたこともありました。また、派遣教員として、海外で日本の教育に携わるという貴重な体験をしました。ここに、マレーシアそしてペナン島の紹介と3年間の概略を報告いたします。

### 2、マレーシア・ペナン概要

マレーシアは、西暦1400年頃、スマトラ島（現在のインドネシア）を中心としたパレンバンの王族が「マラッカ王国」の建国を宣言したのがその始まりとされています。その後、ヨーロッパからの最初の交易船がマラッカに寄港し、繁栄を極めたため広くヨーロッパに知られるようになりました。このマラッカに魅力を感じたポルトガルは、軍艦を連ねてマラッカを侵略しました。

以降、ポルトガル植民地時代、オランダ植民地時代、イギリス植民地時代を経て、第二次世界大戦時には日本により占領され、大戦終了後は1963年にマレーシア連邦として成立し、1965年にシンガポールが分離独立して、連邦立憲君主制国家である現在のマレーシアとなりました。



マレーシア
総面積：約330,000km <sup>2</sup>
人口：約2700万人
公用語：マレーシア語
ペナン
総面積：285km <sup>2</sup>
人口：約70万人



マレーシアは3つの主要な民族（マレー系・華人系・インド系）が複雑に混ざり合った多民族国家です。さらにマレー系の中にはボルネオ島の先住民族が含まれ、華人系の中にはプラナカン（海峡華人）と呼ばれるマレー系と華人系の混血の人々（裕福な支配階級）も含まれます。また、国教はイスラム教ですが、華人には仏教徒、インド系にはヒンドゥー教徒が多く見られます。

1981年以後、マハティールが首相に就任し、日本や他のアジア諸国の成功に目を向けようとする“ルック・イースト政策”を打ち出し、1988年以降は高い経済成長率を維持し、東南アジアの中でも先進的な地位を築きました。その後、数度の通貨危機がありましたが、自国で石油産出ができる為、独自の通貨政策を取り、何とか切り抜けてきました。2003年にマハティール首相が引退をし、アブドゥラ首相が、そして現在はナジブ首相が政策を引き継ぎ、現在に至っています。2007年にはマレーシア独立50周年を迎え、日馬友好も50年を越えました。



ペナン島はマレー半島の北西、タイとの国境に近い位置にある島で、古くから「東洋の真珠」「インド洋のエメラルド」と呼ばれた国際的観光地です。

南北約24km、東西約15kmの島で人口は約70万人。中国系71%、マレー系16%、インド系12%、その他1%の人々が互いの文化を維持しながら調和を保って生活しています。ペナン州の州都ジョージタウンは、咲き乱れる花と緑の中に、英国統治時代からのコロニアル様式の家々が建ち並び、たわわに実をつけたやしやパパイヤの木々が南国の情緒を誘う美しい街です。

また、島の西側や南側に行くとやしの木々の間に高床式の家が点在し、モスクからはアル＝クルアーン（コーラン）が聞こえてくる閑かなカンポン（村）が存在します。しかし最近では、この閑かなカンポンにも開発の波が押し寄せ、あちこちに大きなマンションやビルが建ち始めています。

島の対岸バタワースとは約13.5kmのペナンブリッジで結ばれており、半島の各都市への南北縦断高速道路とも直結しています。街中の交通量はかなり多く、道路は一方通行が増えてきたため、しばしば交通渋滞を起こします。

ペナン州の在留日本人は約1500人で、そのほとんどは島内に居住しています。島内のバヤンレパスや対岸のバタワース地域などに工業団地があり、これらの地域に約200社の日系企業が進出しているほか、近年いわゆるロングステイの日本人が約400人居住しており、その数は年々増加しているそうです。



ジョージタウンは東アジア、東南アジアにおいて類をみないユニークな建築様式、そして文化的な町並みを構成していることが高く評価され、マレーシアでは初の文化遺産として、2008年7月7日、マラッカと共にユネスコ世界遺産に登録されました。ジョージタウンの町並みは商業ビルや住居などに18世紀末のイギリス支配時代の面影を強く残しています。

ジョージタウンがユネスコによってマラッカとともに世界文化遺産に登録されたのは2008年です。その世界遺産登録基準は、

- ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠。
- 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例。

登録の際に大きなポイントになったと云われているのは、東西文化が融合した特殊な街並みです。ペナンの「マスジット・カピタン・クリン通り」は中国寺院、イスラムモスク、キリスト教会、ヒンドゥー寺院が立ち並ぶ世界でも類を見ない地域です。この場所が「ハーモニー通り」と呼ばれているのは、これらの異文化の建築物が何の違和感もなく並立しているからかも知れません。



### 3、ペナン日本人学校（PJS）の様子

#### 1) ペナン日本人学校概要

ペナン日本人学校は、もともとクアラルンプール（以後KL）日本人学校の補習学級として昭和46年にスタートしました。1回目はKLで聴講授業、2回目は教諭がKLから出張しての授業だったそうです。その後、昭和49年に小学部が認可され、3年後の昭和52年に中学部が認可され今日に至ります。

児童生徒は、主にジョージタウンのコンドミニアム各所に居住しており、そこから地域ごとに運航する7台のスクールバスを使用して通学しています。





2) ペナン日本人学校の1年間(平成24年度)

<4月>

4月15日 始業式

4月16日 入学式

<5月>

5月10日~14日 家庭訪問

5月10日・11日 学力検査(国語・算数)

5月15日 カラーリングコンテスト&チャイニーズカリグラフィー

<6月>

6月6日 運動会

6月29日・30日 海外邦人医療基金による歯科小児科相談会

<7月>

7月17日 ペナン盆踊り大会

7月22日~27日 個別懇談会

7月30日 1学期終業式

<9月>

9月1日 2学期始業式

9月30日 ペスタ・ブンガ・ラヤ

<10月>

10月25日 バタフライファーム校外学習

<11月>

11月11日 セント・クリストファー校との交流会(招待)

11月2日 中学部水泳記録会(オープンデー)

11月22日~26日 ペラ補習校体験入学

<12月>

12月10日~15日 個別懇談会

12月22日 2学期終業式

<1月>

1月7日 3学期始業式

<2月>

2月6日 小学部低学年水泳記録会(オープンデー)

2月13日 日曜授業参観

2月17日 日本人会館校外学習

2月18日 セント校との交流会(訪問)

<3月>

3月 2日(水) 日本人墓地清掃

4日(金) 小6を送る会

15日(火) 卒業証書授与式

18日(金) 修了式 離任式



### 3) PJS の教育課程について

中学部 週 3 1 時間+委員会・クラブ 1 時間  
小学部 4 年生以上 週 3 0 時間+委員会・クラブ 1 時間  
小学部 3 年生 週 2 9 時間  
小学部 2 年生 週 2 8 時間  
小学部 1 年生 週 2 7 時間



### 4) 子どもたちの様子

ペナン日本人学校の現在の児童生徒数は約 1 4 0 名で、小中併置の小規模校です。保護者の多くは日本企業からの駐在社員で、いずれ日本に本帰国、またはさらに海外に転勤します。「日本に帰国してから学習に困らないようにしてほしい」というのが保護者の一番の願いであり、学力に関する要望は高いと言えます。日本企業の駐在社員のほかには、両親のうちどちらかが現地の方で現地の幼稚園に通っていた児童もおり、そのような場合、日本語の読み書きが十分ではないケースがありますのでその中での一斉授業は日本とは違う苦勞もあります。全体的に落ち着いていて、中学生は小学生の面倒をよくみる、小規模校ならではのアットホームな雰囲気のある学校です。

## 4、P J S における国際理解教育の概要

PJS では、国際理解教育を〇〇〇と位置付け、①全学年週 2 回の ESL 授業 ②現地校との交流 を行っています。ESL 授業は現地スタッフ（マレーシア人）を採用し、学年を 3 ～ 4 つの能力別のグループに分けます。

日本から編入してきたばかりの児童生徒は、当然ながらまったく喋れません。アルファベットの読み書きから始まり、かんたんな挨拶やお礼などの会話を英語で言えるようになっていきます。最初は照れたり緊張したりしている児童生徒も、「英語の学習が毎週あるのが当然」という周りの雰囲気のおかげで徐々に話せるようになっていきます。また、現地校との交流会では、司会進行やゲームの説明を英語で行うため、何度も何度も繰り返して練習します。

## 5、現地教育に関する調査・研究を通じて

在外教育施設に派遣されると、現地教育調査が義務付けられます。わたしが現地教育調査に選んだ教科は社会、テーマは「マレーシアにおける歴史教育の指導について」です。歴史教育は、その国の歴史観を色濃くうつしており各国によって教科書の内容や指導方法が大きく異なります。マレーシアは主要な三民族の他にも多くの少数民族を内包する多民族国家であり、今後さらに国際社会に目を向けた社会科教育を進める上で、参考になるのではないかと考えたからです。

調査の内容としては

- ①マレーシアの中でのマレー系学校・中国系学校・インド系学校における歴史教育の内容
  - ②各学校で使用されている教科書の内容の比較検討
  - ③歴史教育の中で、指導者が児童生徒に身につけてほしいと留意している点
- の3つに観点を絞りました。

年に一度現地校を訪問し、学校見学や授業見学をします。もっと詳しく知りたい時はその場でアポイントメントをとって、別な日に再度訪問したこともありました。以下、簡単に調査結果および考察を述べさせていただきます。

### < 全体の調査結果および考察 >

- ①マレーシアの中でのマレー系学校・中国系学校・インド系学校における歴史教育

多民族国家ということもあり、各民族の内情や歴史に留意した内容の歴史教育を行っているのでは、という予測のもとに調査を行った。しかし、高等学校・中学校とも、マレーシアの歴史をまんべんなく教えているものの、民族独自の特徴には触れていないようだった。それぞれの学校によって教える内容が偏っているということもない。むしろ、多民族ということで、個人の主観や家庭での慣習が授業内容に反映しないよう、徹底して客観的な内容の授業にしているように感じた。また、欧米やアフリカ諸国、アラビア地域などの歴史を教える時間はあまりとられていない。高等学校の世界史の教科の中で主要な内容に触れる程度である。

- ②各学校で使用されている教科書の内容の比較検討

教科書は公立学校（F7～F9）であれば、マレー系・インド系・中華系の区別はなし。

- ③歴史教育の中で、指導者が児童生徒に身につけてほしいと留意している点

マレーシアの学校で歴史が必修教科になったのはほんの十数年前であり、それ以前は選択制で一切歴史の授業を受けないこともあった。しかし、かつてEducational Ministerを務めたマハティール首相の発案のもと、現在は必修科目として公立学校に通う全児童生徒がマレーシアの歴史を学んでいる。その背景には「マレーシアの歴史に寄与した人物やその背景を知ることが、愛国心につながる」という考えがある。実際に授業を見ても、「マレーシアという国についてどう思うか」という発問や「今日の内容について、マレーシアの文化や経済、地域の慣習という観点からまとめなさい」など、「我々はマレーシア人である」というアイデンティティを前面に押し出した授業であると感じた。そして、話を伺った先生方も実際にそれを意識しているとのことであった。Form1～3はマレーシアの大まかな歴史を学習し、form4は世界史を学習する、Form5でさらに深くマレーシアの歴史を学ぶことになる。

「歴史を学ぶことによって、もっとマレーシアを愛しマレーシア人であることに誇りをもってほしい」というのが教職員の共通した願いである。

## 6、おわりに

「ペナンでの3年間の日々」。

言葉にすると短く、あっけなく思えてしまいますが、ペナンでの日々はわたしにとって激動と驚きと感動の日々でした。

つらいことは、もちろんたくさんありました。着任して1年目に小学部2年生の担任と中学部の社会科の教科担任を担当し、教材研究や中間・期末テストの作成に追われ夜中まで学校に残って仕事をしたこと。交流会や音楽クラブの担当（毎年7月に、ペナン盆踊り大会のステージで6万人ともいわれる観客の前で演奏する）など「日本人学校」特有の行事に追われ、仕事のリズムをつかめず苦しんだこと。授業で使いたい教材がどこをさがしても見当たらず、日本の友人に頼んで取り寄せたこと。ペナンを地域素材として社会科の副読本の編集を担当したときは、週末返上で校正作業をしたこと。「日本は第2次世界大戦の戦争責任から逃げている。卑怯だ。」と見学先の現地校の先生から英語でいわれ、何一つ英語で伝えられない自分に悔しくて泣いたこと。

しかし、今振り返ると、思い出すのはつらいことではないのです。悩んだとき何度も相談に乗ってくれた同僚の先生方。いつも笑顔で全力でぶつかってきてくれた児童生徒と、あたたかく支えてくださった保護者の皆様。仕事のことから生活のことまで、どんな些細なことでも優しく教えてくださった現地スタッフ。そして、マレーシアののんびりした空気とおいしい食べ物、親日家で親切なマレーシアの人々と子どもたちの目の輝き。日本人とかマレーシア人とか、そんなことは問題ではなく、人と人との「心のふれあい」があれば、たとえ仕事がつらくても人間は明日も頑張れるものなのだということがわたしの心に強く沁みしました。

「国際理解」に大切なものとは何なのか。それは、相手の国の文化・風習・言語を尊重し上でもなく下からでもなく「対等に」理解しようと努めることです。こちこちに固まった自分の偏見から脱却する柔軟さと違いを認める勇気を持つことです。そして、間違いなく大人より子どものほうが偏見や思い込みにとらわれることなく、まっすぐな視点で国際理解に取り組めると信じています。

わたしが経験した3年間は、どんなに言葉を尽くしても伝えきれません。言葉で伝えることなど、もともと不可能なことなのかもしれません。けれどそれでもやはり、わたしは誰かに伝えたいと思いますし、同じような体験をした先生方のお話を伺いたいと思います。この経験をひとりひとりの体験談として終わらせず何かを共有とともに課題を追究することで、北海道の国際理解教育に微力ながら関わらせていただければ幸いです。





# マレーシアギャラリー

